

原 寛*: 東亜植物註解 (16)**

Hiroshi HARA*: Comments on the East Asiatic plants (16)

59) トキンイバラ 日本で古くから広く栽植されていた植物の中に近年急速に少なくなったものがあり、トキンイバラもその一つである。白い重弁花はバラそっくりだがキイチゴの仲間であるのが面白く、早くから関心をもっていたので今も庭に植えている。歴史の古い栽培植物の起源来歴を追求するのは非常に難かしいが、また興味ある問題でもある。

トキンイバラの学名によく使われる *Rubus rosaefolius* Smith (1791) は、インド洋のモーリシャス群島で Commerson が採集した標本に基いて発表された。ロンドン・リンネ協会の Smith Herbarium には2枚の標本が保管されている。その1枚 (no. 902-63) は、Smith の原出典の図 t. 60 と比べ、左右を逆にすると全く一致する形をしていて基準標本とみなされる。茎には軟毛が密生し、やや曲った刺が散生し、葉柄・花梗などにもかなり開出した毛が密生し、萼裂片は長さ約 10 mm 外面には粗毛と盤状の腺点が見られ、花は単弁で花弁は倒卵形、大きさは 7×5 mm で萼裂片より短かく、集合果は少し若い大きさは 7×5 mm で円味があり、小核果は無毛で網状の隆起がある。苞葉の下面には盤状腺点が散在し、葉は上面脈上に毛があり、下面は標本では見られないが原記載には 'resinoso-guttata' とある。他の1枚の標本 (no. 902-62) もモーリシャス島産であるが1826年の採品で後から加えられたものである。この方が大形で葉も大きく、萼裂片は長さ 15 mm、花弁は長さ 8 mm、若い集合果は長味があり楕円形である。

Rubus rosaefolius は東南アジアの所々から報告されているが、その原産地は今だにはっきりせず、近似の他種と混同されている場合も多い。モーリシャス島のものもマレイ諸島から持ちこまれたといわれている。*Rubus Commersonii* Poirlet (1804) はジャワから、*R. chinensis* Seringe (1825) は中国から記載されたが、共に *R. rosaefolius* と同一種である。

この種の重弁花をもった園芸品と思われるものが *Rubus rosaefolius* var. *coronarius* Sims (1816) と名付けられ、これも古くから栽植されている。私は1960年シッキムの首都ガントクで栽培されていた重弁花品を持ち帰り東京大学で栽植して観察し、1965年まで開花していたがその後なくなった。これは全体やや小振りで、茎に若い時鈍稜があるが角ばらず、葉柄・葉軸・花軸・葉面にも軟毛が多く黄色小盤状の腺点が散在し、この

* 東京大学 総合研究資料館植物部門, Department of Botany, University Museum, of Tokyo, Hongo, Tokyo.

** 本誌 59: 225-236 (1984) から続く。

腺点は葉下面や若枝上部で目立ち、小葉は浅緑色で脈があまり凹まず皺にならず、花は白色重弁で径 2-3 cm であった。これは *Rubus rosaefolius* f. *coronarius* (Sims) O. Kuntze とよく一致するので、この学名で発表 (1966 & 79) すると共に、トキンイバラとは異なったものであることを確認した。

1944年 Bailey もこの仲間を検討し、*R. coronarius* と *R. rosaefolius* とは別種であるとしたが、*R. coronarius* の来歴は 'Rubus mysteries' の一つであると記している。またバライチゴは別物としてふれているが、日本のトキンイバラは見えないようである。

日本では貝原益軒の「花譜 (1698刊行) 卷之中」に「コヤヲキ醜藤花」としてでているのがトキンイバラの最初の記録とされている。同書には「又花のうすあかきあり。」と記され、文政の頃にはすでに斑入り品も図解されており、日本では古くから広く栽植されていたことをうかがわせている。国外に知られたのは Siebold 以後で、Miquel (1867) は *Rubus rosaefolius* Smith にあて、Maximowicz (1872) は *R. rosaefolius* β. *coronarius* Sims 2. *flore pleno* として扱っているが、バライチゴも同一変種中の 1. *flore simplicis* としている。国内では牧野先生が1901年に *R. rosaefolius* γ. *coronarius* b. *pleniflorus* Makino とされたが、1909年にはトキンイバラに *R. Commersonii* Poir. を採用され、バライチゴをその変種 var. *simpliciflorus* Makino とされた。小泉先生は1913年には *R. rosaefolius* var. *coronarius* Sims を用いられたが、渡欧中の研究に基づいて1930年トキンイバラは *R. rosaefolius* とは別種と認め中国産の *Rubus eustephanos* Focke (1905) の新変種 var. *coronarius* Koidzumi と命名された。近年バライチゴの学名には *Rubus illecebrosus* Focke (1899) が広く採用されるようになったが、トキンイバラに対しては大井博士 (1953以来) は *R. Commersonii* Poir. を用い、北村博士 (1977 & 79) は *R. rosaefolius* f. *coronarius* (Sims) O. Kuntze を用いられ、また f. *eglandulosus* Kitamura の名を付記されたが正式には発表されなかった。

トキンイバラは、初めに記した *Rubus rosaefolius* (var. *coronarius* をふくめ) とは異なり、茎には顕著な縦稜があり、茎・葉柄・葉軸・花梗は無毛で腺点は全くなく、まばらに先の曲ったやや扁平な刺を散生し、小葉は上面濃緑色で平行した側脈がはっきり凹んで全体が皺に見え、若葉で主脈上と側脈の合間に毛を散生するだけで、花は大きく白色重弁で径 4-5 cm になる。それに var. *coronarius* はむしろ熱帯性で、古くからインド、ジャワ、南支その他東南アジア、更に中米、西インド諸島やブラジルなどに栽植されていて、トキンイバラと異っている。それ故私はトキンイバラは *Rubus rosaefolius* とは別種であると思う。小泉先生 (1930) も同意見であったが、古くから中国原産といわれてきたことを考慮されてか、*Rubus eustephanos* Focke の変種とされた。しかし中国産のこの種もトキンイバラとは異っていて、私は別種であると考え。

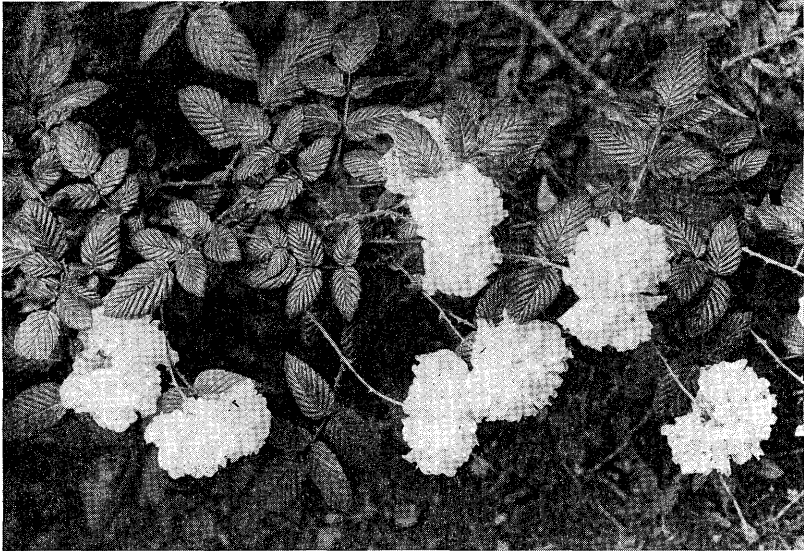


Fig. 1. *Rubus illecebrosus* Focke f. *Tokinibara* Hara. The type stock, May 20, 1984.

そうするとトキンイバラの原種は何かが問題になる。牧野先生（1940）はバライチゴの項で「本種ほとんがいばらト同種ト断ズベキ理由アリ。」と明記しておられる。これまでトキンイバラは花が前年の長枝の腋から出る短枝の先につき、花枝の葉の小葉は3-5枚、長楕円形で先が短かくとがり、花が重弁であることで、バライチゴから区別されてきた。しかしトキンイバラでも花枝の葉は3-7枚の小葉をつけ、新条の葉の小葉は7-11枚あり、披針形で先がとがる。一方茎・葉柄・花梗などの毛や刺の状態、小葉の皺や毛の生え方などは両者よく一致し、バライチゴは花が単弁で横向きに平開する点だけが異点といえる。したがって私は牧野説に賛成で、トキンイバラはバライチゴの栽培品種として扱いたい。

もう一つ気になるのは、トキンイバラは中国原産であるという古くからの説である。私の見た南支産の古い標本は *R. rosaefolius* f. *coronarius* で、トキンイバラの中国産標本はまだ見ていない。また最近の中国高等植物図鑑 2: 274 (1972) の *Rubus rosaefolius* も記載から判断して本物であり、トキンイバラではない。花譜以来トキンイバラに漢名があてられ中国原産とされてきたが、同書では前述の「コヤヲキ」のすぐ前に「ハマナス玫瑰花」が記されており、当時は最も近いと思われる中国産植物にあててその漢名を引用したにすぎない。ハマナスが今ではマイカイと別物であることが分っているのと同様であろう。

こう考えると、トキンイバラは日本特産のパライチゴから元録以前に日本で育成された園芸植物であるとみてもおかしくないと考ええる。これらを整理すると次のようになる。

Rubus rosifolius Smith, Pl. Icon. Hact. Ined. 3: t. 60 (1791); in Rees, Cyclop. 30: Rubus no. 1 (1819)—Maxim. in Bull. Acad. Sci. St.-Pét. 17: 156 (1872)—Hook. f. in Bot. Mag. 113: t. 6970. (1887), p. p.—Focke in Bibl. Bot. 17 (72): 153, f. 65 (1911)—Rehder, Man. Cult. Tr. & Shr. ed. 2, 413 (1940); Bibl. Cult. Tr. & Shr. 287 (1949)—Bailey in Gent. Herb. 6: 328, f. 167 (1944).

R. Commersonii Poirét, Encycl. Méth. Bot. 6: 240 (1804).

R. chinensis Seringe in DC., Prodr. 2: 557 (1825).

R. rosaefolius α . *tropicus* Maxim., l. c. 156 (1872).

Authentic specimens examined:

Mauritius. Isle de France, Comm. Thouin 680 (Herb. Smith no. 902.63—type of *Rubus rosaefolius* Smith, LINN); common in the Mauritius, Gov. Fiquhar 1826, Herb. Smith no. 902.62, LINN).

China (Staunton, 1816, Herb. Lamb., isotype of *Rubus chinensis* Seringe, BM).

f. **coronarius** (Sims) O. Kuntze, Rev. Gen. Pl. 1: 224 (1891), sub γ . *normalis*—Hara & Ohashi in Fl. E. Himal. 131 (1966)—Hara in Enum. Flow. Pl. Nepal 2: 146 (1979).

Rubus rosaefolius β . *coronarius* Sims in Bot. Mag. 43: t. 1783 (1816)—Hooker, Icon. Pl. 4: t. 349 (1841)—Hance in Ann. Sci. Nat. Bot. ser. 5, 5: 212 (1866)—Backer et Bak.-Brink, Fl. Jav. 1: 515 (1963).

R. sinensis Hort. ex Sims, l. c. (1816), pro syn.

R. coronarius (Sims) Sweet, Hort. Brit. 144 (1827)—L. H. Bailey in Gent. Herb. 6: 327, f. 166 & 167c (1944).

R. rosaefolius Smith sensu Wallich, Cat. 22, no. 728 (1829).

Rubus illecebrosus Focke in Abh. Nat. Ver. Bremen 16: 278 (1899)

f. **Tokinibara** Hara, f. nov. (Fig. 1).

Rubus rosaefolius Smith sensu Miq. in Ann. Mus. Bot. Lugd.-Bat. 3: 34 (1867).

R. rosifolius β . *coronarius* Sims 2. *flore pleno* Maxim. in Bull. Acad. Sci. St.-Pét. 17: 157 (1872).

R. rosaefolius γ . *coronarius* Sims b. *pleniflora* Makino in Bot. Mag. Tokyo 15: 52 (1901), p. p., nom. illeg.

R. Commersonii Poir. sensu Makino in Bot. Mag. Tokyo 23: 150 (1909),

p. p.—Nakai in Bot. Mag. Tokyo 30: 224 (1916), in adnota—Makino, Ill. Fl. Nippon 461, f. 1381 (1940)—Ohwi, Fl. Jap. 644 (1953); ed. Eng. 535 (1965); ed. rev. 751 (1965).

R. rosifolius var. *pleniflorus* Makino ex Matsumura, Ind. Pl. Jap. 2(2): 236 (1912), nom. illegit.

R. rosaefolius var. *coronarius* Sims sensu Koidzumi in Journ. Coll. Sci. Univ. Tokyo 34(2): 147 (1913).

R. eustephanos Focke var. *coronarius* Koidzumi, Fl. Symb. Or.-As. 64 (1930), pro nom. nov.

R. rosaefolius f. *eglandulosus* Kitamura in Iinuma, Sōmoku-dzusetsu, Woody Pls. 1: 198 & 536 (1977), nom. illegit.; in Col. Ill. Woody Pls. Jap. 2: 67 (1979), in nota, nom. illegit.

R. rosaefolius f. *coronarius* O. Kuntze sensu Kitamura, l. c. 67, t. 85, fig. 522 (1979).

Caulis distincte angulatus, glaber, eglandulosus, aculeis basi complanatis apice recurvis parce armatus, biennis. Folia innovationum pinnatim 7-11-foliolata, foliolis late lanceolatis acutis; folia ramulorum floriferorum 3-7-foliolata, foliolis anguste oblongis apice breviter acutis; foliola supra intense viridia, rugosa, primo inter venulas laterales paralleles valde impresses parce appresse pilosa, infra vulgo glabra, eglandulosa; petiolus et rachis foliorum glaber, parce aculeatus. Flores terminales 1-2, albi, pleni, 3.5-5 cm in diametro. Pedicelli glabri. Lobi calycis 12-14 mm longi, ovati, apice longe caudati, extus ad marginem et intus albo-tomentosi.

Typus: Cultivated at Kamimeguro, Tokyo (H. Hara, May 26, 1984, fl., TI).

This double-flowered rose-like raspberry called 'Tokin-ibara' has been cultivated in gardens of Japan from old days, but it has been confused with *Rubus rosaefolius* f. *coronarius* which also has long been planted widely in tropical south and west Asia. I have examined authentic specimens of *Rubus rosaefolius* Smith including the type, and arrived at the conclusion that 'Tokin-ibara' is specifically distinct from *R. rosaefolius*, and the Japanese plant was probably derived directly from *Rubus illecebrosus* Focke of Japan.

60) コモチレンゲ 本誌 56: 185 (1981) で、コモチレンゲをアオノイワレンゲとは別種として、イワレンゲの変種とする見解が発表された。アオノイワレンゲは冬になると大形の根出葉は枯れてロゼットの中央に扁球形の冬芽をつくって越冬する。しかしイワレンゲでは粉白をおびた大形の根出葉がそのまま越冬し冬芽を作らない。コモチレ



Fig. 2. *Orostachys malacophyllus* Fisch. var. *Boehmeri* (Makino) Hara.
At Irika, Shakotan, Hokkaido. Jun. 9, 1977.

ングは前者の型に属し、イワレンゲとは別種と考える。最近ではアオノイワレンゲはコイワレンゲもふくめ *Orostachys malacophyllus* にいれる意見が多い。この学名はシベリア産に基いて記載されたもので、日本の海岸で変化に富んでいるアオノイワレンゲと全く同一かどうか疑問が残る。コモチレンゲは緑色で時に赤味をおびることはあるが粉白にはならず、葉の先端は短鋭頭、若い葯はピンク色である。コイワレンゲも男鹿半島などでは時に細い走出枝を出すのを見ているので、コモチレンゲとはごく近いと考えられる。そこで一応コモチレンゲも広義の *O. malacophyllus* に入れて扱っておく。

なおコモチレンゲは北海道で Boehmer が採った 1 枚の標本に基いて記載されたが、その詳しい産地は不明である。私はこの標本のように葉腋から小苗をつけた細い走出枝を四方に出す型が、後志積丹半島の海岸岩上で普通に見られることを観察した (Fig. 2)。そうしてこの近くには葉柄に開出した毛が密生しているタケシマダイモンジソウが見られ、その学名 *Saxifraga Fortunei* Hook. f. var. *pilosissima* Nakai もまた北海道産 Boehmer の採品に基いている。この両者は北海道の他の海岸ではあまり見かけないので、おそらく Boehmer は両者をこの地方の海岸で採集したのだらうと推測している。

***Orostachys malacophyllus* (Pallas) Fischer**

var. **Boehmeri** (Makino) Hara, comb. nov. (Fig. 2).

Cotyledon malacophylla Pallas var. *Boehmeri* Makino in Bot. Mag. Tokyo 16: 214 (1902).

Cotyledon Boehmeri Makino, l.c. (1902), pro syn.

Sedum Boehmeri (Makino) Makino in Journ. Jap. Bot. 4: 8 (1927).

Orostachys Boehmeri (Makino) Hara in Bot. Mag. Tokyo 49: 73 (1935).

O. aggregatus (Makino) Hara var. *Boehmeri* (Makino) Ohwi in Bull. Sci. Mus. Tokyo 33: 73 (1953).

Sedum Iwawange (Makino) Makino var. *Boehmeri* (Makino) Ohwi, Fl. Jap. ed. rev. 693 & 1440 (1965).

Orostachys Iwawange (Makino) Hara var. *Boehmeri* (Makino) H. Ohba in Journ. Jap. Bot. 56: 186 (1981); in Wild Flow. Jap. 2: 149 (1982), p. p., excl. t. 141, f. 4.

Hokkaido (Yezo) (L. Boehmer—type of *Cotyledon malacophylla* var. *Boehmeri* Makino in TI). Shiribeshi: Kamui-misaki (H. Hara & S. Kurosawa, Jun. 9, 1977, TI).

61) **チドメグサ** チドメグサの仲間も 地域の変異が多く見られ、分類の難かしいものの一である。日本に普通なチドメグサは *Hydrocotyle sibthorpioides* Lamarck (1789) にあてられている。この種はインド洋、モリシャス島産といわれ、私は1954年その基準標本をパリで見したが、全体無毛で葉の裂け方がごく浅い形で、日本のチドメグサと同一種であると判定した。昨夏7月ブータン中部で採集したチドメグサは、葉の下面にあらひ毛がかなり生えており、葉柄上部にも逆毛が見られる型であったので新品種として記載する。日本のチドメグサは無毛であるが、中国や東南アジアには多少毛のする形があるらしいが十分な資料が見られなかった。

台湾から記載されたタカサゴノチドメ (正宗1930) は、葉の下面や葉柄上部に長い (0.5-1.5 mm) 粗毛が生えているばかりか、葉は5深裂し、裂片は倒卵状楔脚で互に離れているので、別種とみなしてよいと思う。種名としては *Hydrocotyle batrachium* Hance (1862) が一番早く、中国からベトナム北部にかけて分布し、琉球では沖縄、宮古、石垣諸島に産する。

Hydrocotyle sibthorpioides Lamarck, Encycl. Méth. Bot. 3: 153 (1789)—Hara, Enum. Sperm. Jap. 3: 312 (1954)—Humbert in Bull. Jard. Bot. Brux. 27: 770, f. 81 (1957)—Hiroe et Constance, Umbel. Jap. 11, f. 4 (1958), p. p.—Hiroe, Umbel. Asia. 1: 10 (1958), excl. *H. formosana* et *H. batrachium*—Shan et Liou in Act. Phyt. Sin. 9: 125 (1964)—Cannon in Hara et al., Enum. Flow. Pl. Nepal 2: 186 (1979)—Liou in Fl. Reip. Pop. Sin. 55(1): 17, f. 4-6 (1979), excl. *H. formosana*.

f. **pilosa** Hara, f. nov.

A typo foliis subtus distincte pilosis, pilis albis grossis 0.2-0.5 mm longis, et petiolis superiore pilosis, pilis saepe reflexis differt.

Bhutan. Tongsa, alt. 2200 m (H. Hara, Kurosawa & Chuma, Jul. 23, 1984—typus in TI); ibid. ca. 2350 m (Grierson & Long no. 1284, May 24, 1979, TI).

The type specimen (Herb. Lamarck, P) of *H. sibthorpioides* which I have examined in 1954 is entirely glabrous, and also all Japanese specimens have glabrous leaves. Somewhat hairy forms seem to occur in China.

Hydrocotyle batrachium Hance in Ann. Sci. Nat. ser. 4, 18: 220 (1862).

H. rotundifolia Roxb. var. *batrachium* (Hance) Chermezon in Bull. Soc. Bot. Fr. 68: 508 (1921); in Fl. Gén. Ind.-Chin. 2: 1137 (1923).

H. formosana Masamune in Journ. Soc. Trop. Agr. 2: 51 (1930)—Liu, Chao et Chuang in Quart. Journ. Taiwan Mus. 14: 27, t. 5, f. 13 (1961)—Walker, Fl. Okinawa 791 (1976)—Liu et Kao in Fl. Taiwan 3: 954, f. 883 (1977).

H. sibthorpioides Lam. var. *batrachium* (Hance) Hand.-Mazz. ex Shan in Sinensia 7: 480 (1936)—Shan et Liou in Act. Phyt. Sin. 9: 126 (1964)—Liou in Fl. Reip. Pop. Sin. 55(1): 18, f. 2. 7-9 (1979).

Distr. C. & S. China, Tonkin, and Ryukyu.

62) イヌシヨウマとオオバシヨウマ 1943年に私がこの仲間を調べた際に、*Actaea japonica* Thunberg については、その基準標本をウブサラで見られた田中・小泉・中井諸先生の一致した意見に従って、これをイヌシヨウマにあてた。最近ウブサラ大学の好意によりその基準標本を検討して貰ったところ、葉の毛の状態などが九州産のウスバミツバシヨウマの型と一致することが分った。その結果、両種の学名は、牧野先生が1901年に発表された通りが正しいことが明らかになったので、ここに学名の混乱を招いたことをおわびして次の通り訂正する。

Cimicifuga japonica (Thunb.) Spreng., Syst. Veg. 2: 628 (1825)—Makino in Bot. Mag. Tokyo 11: (248) (1897); 13: (198) (1899); 15: 171 (1901)—Hand.-Mazz. in Act. Hort. Gothob. 13: 47 (1939).

Actaea japonica Thunb., Fl. Jap. 221 (1784).

Pityrosperma acerinum Sieb. et Zucc. in Abh. Acad. Wiss. Muench. 3(3): 735 (1843); 4(2): 184 (1845), nom. illegit.

Actaea acerina (Sieb. et Zucc.) Prantl in Engl., Bot. Jahrb. 9: 246 (1888).

Cimicifuga japonica var. *acerina* (Sieb. et Zucc.) Huth in Engl., Bot. Jahrb. 16: 316 (1892); in Bull. Herb. Boiss. 5: 1093 (1897).

Cimicifuga acerina (Sieb. et Zucc.) T. Tanaka in Bult. Sci. Fak. Terk.

Kiusu Univ. 1(4) : 203 & 209 (1925)—Koidzumi in Bot. Mag. Tokyo 44 : 100 (1930)—Hara in Act. Phyt. Geobot. 13 : 200 (1943)—Ohwi, Fl. Jap. 536 (1953); ed. Eng. 457 (1965); ed. rev. 632 (1965)—Kitamura et Murata, Col. Ill. Herb. Pl. Jap. 2 : 219 (1961)—Emura in Journ. Jap. Bot. 45 : 304 (1970)—Hsiao in Fl. Reip. Pop. Sin. 27 : 96 (1979), cum 3 formae—Satake et al., Wild Flow. Jap. 2 : 60 (1982).

var. **japonica**.

Cimicifuga acerina var. *typica* Hara et var. *intermedia* Hara, l. c. 200 (1943).
Distr. Japan (Shikoku, and Kyushu), and Quelpaert.

var. **macrophylla** (Koidzumi) Hara, comb. nov.

Cimicifuga macrophylla Koidzumi in Bot. Mag. Tokyo 44 : 101 (1930).

C. chinensis Koidzumi, l. c. 102 (1930).

C. acerina var. *macrophylla* (Koidzumi) Hara, l. c. 201 (1943).

Distr. Japan (Honshu, Shikoku, Kyushu), S. Korea, and Central and West China.

var. **peltata** (Makino) Hara, comb. nov.

Cimicifuga japonica f. *peltata* Makino in Bot. Mag. Tokyo 24 : 140 (1910).

C. peltata (Makino) Koidzumi in Bot. Mag. Tokyo 44 : 101 (1930).

C. acerina var. *peltata* (Makino) Hara, l. c. 201 (1943).

Distr. Middle Honshu.

Cimicifuga biternata (Sieb. et Zucc.) Miquel in Ann. Mus. Bot. Lugd.-Bat. 3 : 9 (1867)—Makino in Bot. Mag. Tokyo 15 : 171 (1901).

Pityrosperma obtusilobum Sieb. et Zucc. in Abh. Acad. Wiss. Muench. 3(3) : 735 (1843); 4(2) : 184 (1845).

P. biternatum Sieb. et Zucc., l. c. 736 (1843); l. c. 184 (1845).

Cimicifuga obtusiloba (Sieb. et Zucc.) Miquel, Ann. Mus. Bot. Lugd.-Bat. 3 : 9 (1867).

C. japonica var. *obtusiloba* (Sieb. et Zucc.) Huth in Engl., Bot. Jahrb. 16 : 316 (1892); in Bull. Herb. Boiss. 5 : 1093 (1897)

C. heterophylla Makino in Bot. Mag. Tokyo 11 : (248) (1897), nom. illeg.

C. japonica var. *biternata* (Sieb. et Zucc.) Finet et Gagn. in Bull. Soc. Bot. Fr. 51 : 521 (1904).

C. japonica Spreng. sensu T. Tanaka in Bult. Sci. Fak. Terk. Kjusu Univ. 1(4) : 203 & 209 (1925)—Koidzumi in Bot. Mag. Tokyo 44 : 100 (1943)—Ohwi, Fl. Jap. 536 (1953); ed. Eng. 457 (1965); ed. rev. 632 (1965)—Kitamura et

Murata, Col. Ill. Herb. Pl. Jap 2: 218 (1961)—Emura in Journ. Jap. Bot. 45: 303 (1970)—Satake et al., Wild Flow. Jap. 2: 60 (1982).

C. japonica var. *acutiloba* Hara, l. c. 200 (1943).

Distr. Honshu (Kwanto west to Kinki), and N. Kyushu (Prov. Chikugo, Gozen-dake, Z. Tashiro, Aug. 16, 1911, KYO).

By courtesy of Dr. R. Moberg, the director of the herbarium, University of Uppsala, I could confirm that the type specimen of *Actaea japonica* Thunberg coincides in the mode of hairiness of leaves with *Cimicifuga acerina* Tanaka. I wish to express my thanks to the director for his kind help. *Cimicifuga biternata* was adopted first by Makino (1901) for the combined species of *C. biternata* and *C. obtusiloba*.

□富成忠夫：森のなかの展覧会 写真65葉。1984。山と溪谷社，東京。¥3,800。地衣類の写真65葉を収めた写真集である。針葉樹林やブナ林の樹皮のほとんどが，多種類の地衣類や蘚苔類で覆いつくされていることはよく知られている。これらの地衣類相互，ときには蘚苔類との組み合わせがさまざまな絵模様をつくっている。著者はこれを“絵”と感じとり，その多様さを展覧会と見てとったところに，自然の中に芸術を探し出すしたたかな感覚がある。「重い式服」には金銀の勲章や飾りで飾りたてた燕尾服を感じるし，「煙をばく汽車」が見えてくるし，「ワインレッドの馬」も見えてこようというものだ。分類という観点からしか地衣類を見ていない私達にとっては全くの驚きであり，こんな形で地衣類が世の人々にひろく紹介されることなど夢にも考えなかった。ここに撮られている地衣類の種類が，コアカミゴケだとかブナノモツレサネゴケだとか，野暮な詮索はやめて，自然の造形の美しさ，奇抜さを堪能してみよう。（黒川 遣）

□Hawksworth, D.L. & D.J. Hill: **The lichen-forming fungi** 158 pp. 1984. Blackie & Son Ltd., Glasgow. £7.95 (paperback). 本書は一般植物学についてある程度の知識をもつ人を対象にした地衣類の解説書である。1. The lichen habit, 2. Thallus structure, 3. Reproduction, 4. Dispersal, establishment and growth, 5. Metabolism and physiology, 6. Ecology and sociology, 7. Biogeography, 8. Secondary metabolites, 9. Environmental monitoring の9章からなり，巻末には各章別に参考文献があげられている。著者等は地衣類を独立の植物群とは認めず，菌類の分類体系に含めるべきものとの強い主張をかねてからもっており，本書の表題もその反映であるが，これについては第1章でわずかにその根拠らしきものが示されているに過ぎない。第2-9章は地衣類についての従来の解説書と基本的には変わるところはない。ただ，最近の知見を盛りこんで極めて要領よくまとめてあり，地衣類の生物学的特性を概観するには手頃な手引書となっている。（柏谷博之）